東海新報　平成21年(2009年)11月1日（日曜日）

「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部創立10周年に寄せて ⑥1

リレーエッセイ

「力を合わせて立っている」

川井村江繋　澄川嘉彦

恥ずかしながらいまだに五葉山に登ったことがない。その山すそに大きな鷲を見に行ったりしたことはあるのだが、山そのものについては美しい花やたくさんいる鹿のことなどを、人から聞くばかりである。

というような門外漢が寄稿するのは気がひけるのだが、日ごろ同じような森の中で暮らしながら感じていることを書いてみたい。

数年前、沿岸部で開かれた福祉の大会に討論者として参加した時、「自立するとはどういうことか」と尋ねられたことがある。私にうまい答えはなかったが、ふと、わが家のまわりに広がる森の姿が頭にうかんだ。

私が暮らすのは五葉山よりもう少し北に位置する早池峰山のふもと、タイマグラと呼ばれる森の中である。今でもカタカナで記す、このかわった地名はアイヌの言葉で「森の奥へと続く道」という意味だと言われ、昔は奥山にふさわしいブナやミズナラといった巨木が立ちならんでいた。

しかし、大木のほとんどが伐られた今はさまざまな木が混生するありふれた森となっている。この普通の森を私は朝に夕に散歩する。毎日のように接している森なのに、この十年で随分と印象が変わった。

十年前に引っ越して来た時、私には森が緑一色にしか見えなかった。両の眼は木々の一本一本を区別して複雑な森の姿をとらえているはずなのに、心に残る印象は緑の絵具でただ一色に塗りつぶしたような無味乾燥なものであった。

それが、この地に住んかたまりではなく、一本一本の草木を感じる力を取り戻してくれたようだ。

私にとって森はもう緑の一色ではない。さまざまな生命が混じり合い、何層にも塗り重ねた深い色をしている。森は変わらないのに私が変わった。森で過ごした時間がゆっくりと変えてくれた。

ゆっくりとした変化の一方で、雷に打たれたように、突然あることに気づくことがある。木々を見ながらいつものように散歩をしていた時、衝撃とも言える思いにうたれた。

「森の木々はみんなで力を合わせて立っている」

何を馬鹿げたことを、と言われても反論のしようがない。言葉では説明できないのだから。理屈ではなく、からだ全体で感じる森からのメッセージなのである。

学校の勉強で、森の木々はお陽さまの光を奪い合って競争しながら上に上に伸びていくと教えられた。本当にそうだろうか。私にはまったく逆のような気がする。

冬になって葉を落とした木々を見上げればよく分かる。まるで陽の光を分け合うように、それぞれの木々の枝が仲良く青い空を分け合っている。たくさんの木々が助け合いながら立っているのだ。おたがい励まし合いながら立っているのだ。

このような森の姿から、冒頭の福祉の集まりで問われた「自立」の意味を考えるなら、「自らの力だけで立っているのではない、ということに気づくこと」が真の自立ではないだろうか。

私たちの社会はどうだろうか。森の木々のように助け合いの心は生きているだろうか。人間は本当に「自立」していると言えるのだろうか。このようなことを日々考えながら、タイマグラの森で暮らしている。

【執筆者プロフィール】一九六三年、広島市生まれ。大学卒業後、NHKで映像制作を始める。早池峰山の麓で暮らす老婦人を取材した番組「マサヨばあちゃんの天地」でタイマグラに出合い、九九年に退職して移住。二〇〇四年、記録映画「タイマグラばあちゃん」を発表。国内各地で上映され、フライブルグ国際映画祭最優秀ドキュメンタリー賞などを受賞。最新作「大きな家～タイマグラの森の子どもたち～」が上映されている。

筆者宅の裏山に広がる森＝川井村